

## 回想

松下任久

8月上旬の暑い盛り、突然、同期の井上寛和君が勤務先へ来られて、お互いの40年ぶりの挨拶もそこそこに、「地理学教室が今年50周年を迎え、記念誌をつくることになった。学年を代表して貴方に何か書いてほしい」とのお話があったが、一旦は辞退した。それと言うのも、私は確かに地理学教室に在席はしたが、卒業後は広告会社へ入社し、爾来地理学とは全くの無縁になってしまっており、卒業後も地理学と深く関わりをお持ちの方が書かれるのがより相応しいと思ったからだ。しかし、井上君の有無を言わせぬ強引な説得についに根負けしてしまった。卒業して40年。すでに記憶の回路にも齟齬をきたしている今日、文中に思い違いや明らかな誤りを見つけても深くは追求しないことと地理学に関係することは一語も書けないことを条件に筆をとらせていただいた。



市大文学部に昭和29年に入学し、33年に卒業した我々の同窓会名は「うつぼ29会」と命名されている。入学当時、杉本町キャンパスの本館を除く大部分を米軍に接収されており、文科系の教養課程の授業は鞆（うつぼ）公園にあった古びた小学校の教室で行われていた。「うつぼ29会」は教養課程を過ごした懐かしのおんぼろ校舎に因んでつけられたものだ。

ここで、我々が学生生活を送った頃の時代的背景について少しく触れてみよう。我々が在学した四年間をいま振り返ってみれば、敗戦の年から僅か十年前後の頃で、世界は東西（米ソ）対立を軸に大きく揺れ動いた時代であった。国外では、ビキニ水爆実験で第五福竜丸被災、毛沢東が国家主席に、イスラエルのエジプト侵攻（スエズ動乱）、米ソの人工衛星打上競争の激化、また、国内では吉田内閣が鳩山内閣に代り、そして岸内閣成立、自由・日本民主両党が合同し自由民主党結成、防衛庁と自衛隊の発足、経済白書「もはや戦後ではない」と宣言など、まさに内外の情勢には片時も目を離せない時代でもあった。別な言い方をすれば、米ソ二大陣営の対立という枠組みの中で、国内では左右勢力が激しく対峙した時代であったといえよう。したがって、当時のどこの大学生であれ、政治情勢に無関心ではいられなかった。ましてや、キャンパスを米軍に闊歩ほしひまにされていた市大生の心情や行動は他の大学とは比較にならない激しさがあった。学生集会は頻繁に開催され多くの学生が参加した。教養課程の講義の中で、打倒資本主義を熱っぽく論じられる教官も一人や二人ではなかったと記憶している。当時、大阪市大が「赤い大学」と世間で喧伝されていた事を、誇らしげにさえ感じていた市大生も少なくなかった筈だ。

今でこそ、往時の熱狂を懐かしく、微笑ましく思えるが、当時は私自身も一抹の途感いを感じながらも反体制的な言動にある種のシンパシーを感じていた。

そのような訳で、入学試験問題を解くことしか知らず、世事に疎い片田舎の高校出身の私などは、そんな空気に極めて自然に感染していった。まず、メイデー参加をクリアーしたあとは、行動も一気

にエスカレートした。市内桜島にあったストライキ中の某汽車工場の工具寮への宣撫行動。某国紅十字社総裁への対右翼防衛作戦？などに、結構なノリで参加したものだ。いま静かに思い返せば、当時の自分が滑稽にも、また逆に羨ましくさえ思われる。

さて、熱にうかされたような教養課程を終え、いよいよ地理学教室へ進むことになった。不思議なことに、地理学を専攻された七名の学友と親しく机を並べるようになった時から学生活動ごっこへの情熱は急速に遠のいていった。自分でも驚くほど、地理学の勉強にのめり込んでいった。それは、七人の学友達はそれぞれ個性的で、揃いも揃ってみな勉強好きで、地理学専攻に対する心構えも大分私とは違っていたことに起因していた。それと、教養課程の終える頃、阪大から来られていたドイツ語の先生にお茶をご馳走になった折りに、「市大の学生さんの皆とは言わないが、この国に明日にでも社会主義革命が起こるみたいに飛び跳ねていらっしゃるが、そんな事は今世紀中には起こりっこないですよ。賭けてもいいよ。むしろ、この体制がどのように発展し変化していくかを、これから大学でしっかり勉強し、社会へ出てからもじっくり観察してみなさい。中途半端な赤旗振りからそろそろ卒業した方がいいんじゃないでしょうかね」と諭されたことも影響している。その阪大の先生が言われた事柄は、今も鮮明に覚えているが、残念ながら先生のお名前はどうしても思い出すことができない。

七人の学友は、当然のことながら、教室へ入ってから本当によく勉強されていた。授業やゼミを無断で欠席する者もいなかった。ここで七人の学友の当時の横顔を席順でご紹介すると、井上寛和君は世俗を超越した僧侶のような雰囲気があり当時から学究肌で、我々学年の右代表で院へ進まれた。現在も二つの大学で地理学を講じておられる。岡山出身の小原利雄君はもの静かな大人で、兄貴分的な存在であった。教職に就かれ、いまは京都にお住まいと聞いている。北濃祥二君は独立独歩の気風で、都会っ子らしく要領よく勉強されていた。登山行が昂じてか、JTBへ就職。後年、東京での有恒会で久々にお会いした時は日本旅行業協会の重職であられた。古高（旧姓赤沢）信雄君は福井県出身の紅顔の美青年であった。地理学への情熱は純粹そのもので、自説を曲げぬ頑固な一面もあった。都会派の千田専一良君は美声の持ち主で、童謡、クラシックから労働歌までレパートリーが広く、教養課程時代は労働歌の指導で度々駆り出されていた。鳥取出身の中谷暢夫君は沈着冷静な秀才肌であった。後年、出身校の名門鳥取西高の野球部部长として甲子園のベンチでご活躍の場面をテレビで拝見させていただいた。紅一点の前田礼子さんは市内ご出身で、色白でいかにも活発なご令嬢といった風情であったが、なかなかの博覧強記で、議論の場でもリードするパワーを持っておられた。一年留年されて、翌年に卒業されたと聞いている。

このような良き学友に恵まれ、尚そのうえ、村松教授、渡辺教授、岩田助教授、水津助教授、川喜田助教授、木村助手、君塚助手、いずれも学会でその人ありと言われた優秀な教授陣から薫陶を受け充実した学生生活を送らせていただいた。にもかかわらず、地理学の勉強を続けなかったのは、私の気紛れであったと言うほかはない。さしたる目的もなく、文学部出身の先輩が何人かおられ、結構おもしろくやっているとの消息だけを頼りに、当時、近代化しつつあった総合広告会社へ入社した。勿論、広告業務は地理学とは直接に関係はありようもなく、米国直輸入の広告論やマーケティング論の基礎をいちから勉強し直さなければならなかった。また、当時は民間のテレビ局、ラジオ局が続々と誕生し、広告メディアの様相が一変し、経済情勢は大量生産・大量消費の時代へ突入していった。その後

の日本の経済的発展と挫折はご承知のとおりで説明するまでもないが、バブル崩壊直後まで広告業務の第一線で仕事をする事ができた。幸いにして、広告・マーケティングの世界は常にエキサイティングで、自分の仕事に一日も退屈することがなかった。平成元年には、運良くボードの一員にも選任され、中国担当として合弁会社の設立にも係った。北京、天津、青島、上海、広州、成都、昆明へは何回ともなく出張し、三都市に日中合弁会社を設立させ、多くの中国人の朋友もできた。いま、常勤監査役として最後の任期を勤めており、来年6月末の退任の日を静かに待っている。

思えば卒業以来四十一年、地理学とは別な世界を夢中で走り続けて来たわけであるが、ようやく一つのゴールらしきものが見えてきた。自分が選んだ道には後悔はしていない。それでも時々、自席のPCで、[www.lit.osaka-cu.ac.jp/geo/](http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/geo/)を覗いているのは、地理学にほんの少しばかりの未練と関心がどこかに残っているからであろうか？

(昭和33年卒業)